

レファレンス講座 開催報告 令和7年2月2日(日)

## 府中のことば

### —東京のなかのことばの地域差とは—

令和7年2月2日(日)午後2時から、レファレンス講座「府中のことば—東京のなかのことばの地域差とは—」をルミエール府中1階第1・2会議室にて開催しました。



講師は、國學院大學名誉教授であり、方言学、音声学、社会言語学を主な研究テーマとされている、文学博士の久野マリ子先生です。

『新東京都言語地図 平成初期の東京のことば』を編集されており、日本全国の方言がどうなっていくかについて、各地域の研究を進めてい

っやいます。先生の研究と紐づけながら、多摩の歴史、特に人口増加の視点からご講義いただきました。

初めに、方言をどう考えていくか、そしてどういうものが方言なのかについてお話いただきました。方言研究者が考えている方言と世間一般に考えられている方言は違います。方言は、ある地域で話されていることば全体をさすため、共通語と同じでも方言と呼びます。そのため、東京都と共通語がまったく同じでも方言となるそうです。この部分は、皆さんひっかかる

ところだと話されていました。

そして、言語形成期というものが一番大事だということです。生まれて2～3歳から12～13歳くらいまでの子どもが、ことばを覚えるあいだ、過ごした地域のことばが基本的なことばになると



のことで。方言を研究する場合、とある地域の方言を研究するうえで、その地域で言語形成期を過ごした人の言語は、その地域で言語形成期を過ごしていない人（13歳を過ぎてからその地方のことばを習得した人）に比べて、言語体系（ことばのシステム）がきれいに出てくるそうです。

次に、方言の研究で使われる、方言区画、方言地図についてお話しいたしました。「全日本方言区画図」という、日本語の各地方言の地域差をまとめたものをスライドで示していただきました。「全日本方言区画図」では、まず琉球方言と本土方言とに方言が分けられており、このうち本土方言はさらに4つに分けられています。この4つのうちのひとつに東部方言があり、さらに区分される関東東部方言に府中が入るとのことでした。

続いて、江戸から東京に変わる歴史の観点からお話しいたしました。1868（慶応4）年に東京府になり、その後1878年（明治11年）に東京府は15区と6郡となりました。1889（明治22）年には東京市が誕生します。1932（昭和7）年に東京市の中の区が再編入されて35区となります。江戸から東京になり、東京が15区から35区になり、東京府に多摩地域

が編入されていくにしたがって、人口は増え、交通の便も良くなります。東京が東から西へ広がることで、方言は色々な影響を受けるようになります。

急激な人口増加によって、もともとの地域に住んでいた人たちは、自分たちの方言を保つのが難しくなります。東京に仕事を持つ人が各地から集まることで、自分の方言だけではやっていけなくなります。そこで誰にでもわかりやすいことばを使うように皆が努力します。それは、多摩地域に限らずに、浅草のような下町も同様だということです。



次に、方言はどうしてできるのか説明いただきました。もともと方言は、奈良時代の文献に「九州方言」「東北方言」などがでてくるので、違いがあることは多少わかっているのですが、今のように華々しい違いが出てくるのは、幕藩体制が確立することによって、人が自由に行き来できなくなったからとのことでした。自由に行き来できなくなることで、ことばというのは非常に早く変わりはじめるのだそうです。また生活環境の違いもあり、日本は南北に長いので、環境により発言する話題に差を生みます。また、その土地の地勢や気候、産業、生活に密接にかかわる分野には多彩なもの(ことば)があります。府中の方言というと、ハケを思い浮かべることが多いかもしれませんが、『日本方言大辞典』によると府中だけではなく、関東地方一円に多い方言だという説明もされました。

講座の後半部分では、東京都の方言区画からお話いただきました。東京都は、関東東部方言となります。府中市が含まれる北多摩地区は23区に近いことから最も早く東京方言

になじんだといわれています。



いよいよ府中方言の特徴についてです。どの時代の人のことばを府中方言と考えるかですが、まず戦前に言語形成期を終えているというところで調べていきます。そうすると、この年代の人たちは東京都内の人たちとの地域差がはっきり

あることがわかります。

そして、府中のことばについて、いくつかの語彙を例にあげ、「府中」のアクセントについてもご説明いただきました。

また、新しく生まれた方言で「～ジャン」や「うざったい」等を地図で示しながら、高年層と青年層と比較しながら説明していただきました。さらに、「たけうま」を「たかあし」というのも多摩の方言であると地図で示されました。様々な事例を挙げながら、消える方言がたくさんある一方、新しく生まれる方言もあることをお話ししていただきました。

最後に、方言を知りたいと思ったら、単語の意味なら方言辞典を調べ、単語がどこで使われているか知りたいときには分類方言辞典が有用とのお話しでした。

なぜ、東京のなかで地域ごとの違いができたのか、多摩と23区の移り変わりがことばにどのような影響があったのかを知るいい機会になりました。参加された方からも「普段聞けない貴重な内容でした」「方言だけでなく、多摩の歴史を知ることができました」などのお声を頂

戴しました。参加者のみなさんからの質疑応答も活発に行われ、あっという間の2時間でした。

図書館では、本講座に関連する本を数多く所蔵しておりますので、ぜひご活用ください。

